

やまぶき

埼玉北西部の和算研究の個人通信

(題字 伊藤武夫氏)

滑川町の和算家・小林三徳

一、はじめに

小林三徳(一八〇五〜七八)は、比企郡滑川町福田の人で幕末期の和算家です。

元治二年(一八六五)に同地の成安寺に算額を奉納しています。この算額に、「関流悉統 小林三徳翁 藤正義」とあるので関流の算者であったようですが、伝系は不明です(ただ文献(3)では栗原辰右衛門に学んだ可能性を指摘しています。小川町の杉田久衛門も初めに栗原に学んでいます)。またこの算額には門人・同志・談友・談柄(なんべい)・志主など四十五名の名が見えますのでそれなりの勢力を誇っていたことがわかります。談柄の中には「越畑 船戸悟平氏任」の名が見えます。門人ではなく算学の仲間であり、船戸悟兵衛のことです。

二、算額

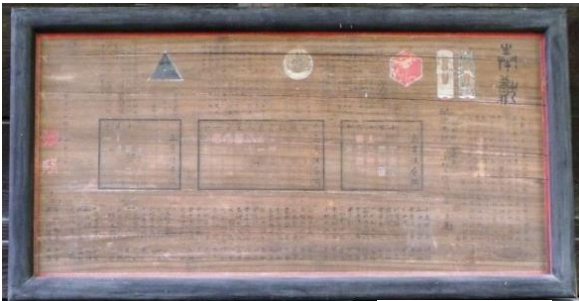
この算額は元治二年小林三徳が六十歳のとき成安寺の馬頭観音堂に奉納したもので、目

第12号 平成二六年(二〇一四)九月七日
発行部数 十五部
(不定期刊行)

発行者 東京都羽村市

山口 正義

的は自分が解いた問題と答を書いて神仏の加護を感謝し、あわせて算学の発展を願ったものです。風化が始まっていて読めない箇所もあります。幸い文献(1)(2)にはかなりの精度で原文が掲載されています。この算額には願主三徳をたたえる序文がつけられ、また門人十四名、同志十七名、談友八名、談柄四名、志主二名の計四十五名が名を連ねています。範囲は遠く江戸、近くは菅谷・広野・越畑等の人たちで、かなり盛況であったようです。問題は立方体・球・三角錐に関するもの三題です。桐材、彩色、



(2010年5月写)

上下 81×幅 156 cm、滑川町有形文化財です。三徳をたたえる序文の読み下しは次のようなものです。(1)

夫れ教術は六芸の一にして人生の急務、一日も無くして済むべからざる者なり。大は之れ則ち日月の会食、小は則ち金穀の出納、これに因らずして其の詳を取らざるなり。猶方円を為すには必ず規矩に於てすることし。伝に曰く孔子かつて委吏と為て曰く「會計は当るのみ」孔子の大聖と雖も尚この術を講究す以て知るべし。福田邨小林氏幼きより此の技能を研精し、其の奥秘を造詣し、広く教を郷党の子弟に布く、其の誘掖(ゆうえき)を受くる者数うるに勝たうべからず。今ここに孟春扁額を製し以て之を同邨の大悲閣に掲げんと欲し、予の一言を題する事を謂う。固辞すれども命を得ず。因つて数字を弁じ其の概(がい)を識して云う

三、墓碑

三徳の墓は滑川町福田にあり、表に「克明庵照道數林法師」、裏に次のような墓誌があります(3)。

小林三徳翁墓碑

小林翁正義字三徳幼名丑太郎克明庵其号也
家世居福田村翁夙受数学於其父三右衛門

正周君壯而極精巧頗得出藍之譽曾門人等謀而揭扁額於里之大悲閣略表其發覺焉又用余刀千農事終驗甚勉矣弁知穀草之雌雄明敷為岡明治五年五月以申告之官官乃賜褒賞云云茲以病卒壽七十有四実明治十一年九月二十九日也

銘曰 受業家庭 勉力推明 明及穀草 実驗細明 其業不朽 豈待余銘 水園大窪康撰

嫡子 小林勝吾正愛
 (注) 大悲閣 成安寺馬頭観音堂

なお、三徳の墓のそばに「快安智慶大姉」とある妻の墓があります(写真参照)。



小林三徳墓(左)と妻の墓(右) (2013年10月)
 成安寺観音堂 (2010年5月)



参考文献

(1)『滑川村史調査報告書 民俗資料 第2集』田中義一(滑川村、1980年発行) 22頁。

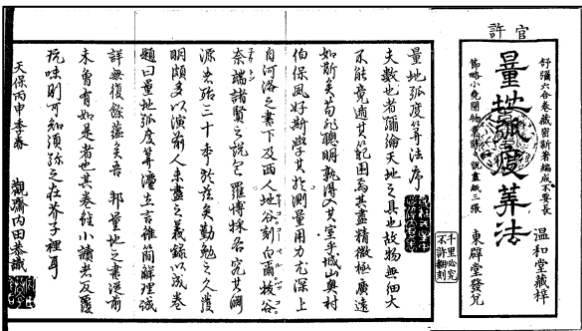
(2)『埼玉の算額』埼玉県史料集第二集 埼玉県立図書館発行 昭和44年
 (3)高柳茂「福田村の和算家小林三徳について」『埼玉史談』60巻1号 平成25年4月

長英逃亡と和算家(その二)

五、その他の和算家(一)

奥村喜三郎は名は増地(ますのぞ)、字は伯保、号は城山。曆算家・測量家でもある。既述のように長英の「蛮社遭厄小記」には、「増上寺御霊屋領代官奥村喜三郎として天算数学に通じける者」とある。蘭字を長英に、和算を丸山良玄・本多利明に、測量を伊能忠敬に学ぶ。

天保九年十月五日の尚齒会の例会に、内田と奥村は二人で制作した測量器具「経緯儀」



奥村喜三郎の『量地弧度算法』(東北大)

を持参した。鳥居耀蔵と平行して江戸湾見分を命じられた江川太郎左衛門が、華山に測量技術者の推薦を依頼し、内田と奥村喜三郎を推挙したのが天保九年十二月、最初は勘定奉行によって許可されなかったが、後、水野忠邦の名で参加を認められ江戸を出発したが、鳥居の理不尽な抗議により奥村は途中から帰されている。奥村の『量地弧度算法』(天保七年)に内田の序文がある。『算法地方大成斥非問答』(天保八年、この書は秋田義一の『算法地方大成』を非難したものとされる)、『経緯儀用法図説』(天保九年)、『廻船宝富久呂』(天保十年)、『算学必究』(天保十二年)などの著書がある。

小林惟孝(これたか(一八〇四〜八七))は通称嘉四郎、あるいは祐吉(祐介とも)。百喩ひやっぼ、牙籌堂(がちゅうどう)と号す。直江津今町の人で、内田に数学を学び、曆術を小出兼政に学ぶ。三度京都に出て算学、測量、陰陽曆法を学び高田藩の台場設置の測量、設計を行なう。土御門家からは奥義秘伝免状を受けたという。牙籌堂という塾を開いて多くの門人を育てた。

長州征討・戊辰戦争に従軍し、その功により苗字帯刀・三人扶持大年寄格待遇を受け、さらに高石を給せられたという。長英を匿つたのは内田との関係があったか

らだろう。内田からすれば信用に足る人物と評価してのことだったのだろう。

花香安精（一七八三〜一八四二）は下総香取郡関戸村（旧万歳村、現旭市）の名主で、藤田嘉言及び内田弥太郎の門人であった。安精は文化七年香取神宮に算額を奉納している（賽祠神算）。また、文化十三年には関流天算法三冊を著している（三上義夫の『算総数字年表』）。さらに文政十三年には安精の門人が岩井不動へ算額を奉納している。因みに千葉県のカナヘ財に指定されている「算総数字文庫」は安精とその一門が収集した和算関係の叢書である。

この安精の子（養子とも）が**花香恭法**で長英の門人であった。こういったことから長英は一時、恭法のもとに行った（逃れた）のだろう。長英は蘭仏辞典などを質にし、五両の金を借りて江戸に戻っている。

なお、後述の剣持章行は天保十年十月に下総に遊歴教授を始めたときに、花香氏に「止宿」している（十一月廿日と十二月四日、『和算家剣持章行の遊歴日記』（大竹茂雄）。恐らく安精と五月の「蛮社の獄」が話題になったことだろう。またその後も天保十三年八月、十四年七月、十五年七月にも花香氏に止宿している。安精は天保十三年五月に亡くなっているから恭法との付き合いがあったと思われる。

林八千雄（藤林八千雄）（一八二四〜七六）は高田藩の御殿医の四男の生まれ。初め小林百咄に学び弘化四年算法の奥義免許を受ける。嘉永元年脱藩して京都に福田理軒を訪ねている。理軒は八千雄に三日間に亘って試問を行ったというが八千雄は試問に悉く答え、理軒をして「予ニ於イテ教ユル所ナシ、海内唯、内田弥太郎アルノミ」と八千雄の習字を称え、「弥太郎氏ハ蘭学ヲ極メテ仰クベキモノアリ、宜シク就イテ研究スヘシト」と内田への推挙の労をとってくれたという（ホームページ「林八千雄は、幕末の隠れた志士」より）。

林八千雄という名は和算関係の本には全く出て来ず、和算家としてどのような実績があるのか不明だが、このホームページの内容によれば後述のように、内田と密接な関係にある。

六、その他の和算家（二）

剣持章行（一七九〇〜一八七一）は上州沢渡の農家の出。板鼻の小野栄重に学び、文政十年に見・隠・伏の三題免許を与えられた。章行三十七歳の時であった。

天保十年の五十歳の時、内田の「瑪得瑪弟加塾」に入門する。壮年の頃より両毛、両総、常陸、武蔵の各地を遍歴して子弟の教育に努力した。特に、常総には多くの子弟が育ち、剣持が末永く遊歴を行う土地になっていた。

明治四年六月、北総の鐫木（千葉県旭市鐫木）において客死した。級数、不定方程式、定積分表などで多くの工夫をこらしたといわれる。著書に、『算法圓理氷積上下二卷』（天保八年序、本書の扉は岩井重遠関、山口言信著となつているが実際の著者は剣持であるといわれる）、『探蹟（たんさく）算法』（天保十一年序）、『算法開蘊』四卷（嘉永元年序）等の刊本があり、他に問題の解義書や草稿類も多い。

『剣持章行と旅日記』（高橋大人）には「瑪得瑪弟加塾」入門に際してのことが概略次のように述べられている。

「天保二年、医師福田宗禎は長英を沢渡に招聘して蘭学の教えを請うた。この時、宗禎は四一歳、長英は二八歳であった。蘭方医学は吾妻の地に定着し発展していった。福田宗禎のもとには柳田鼎蔵、高橋元貞、高橋景作、望月俊斎などが集まり、蘭方医学の研究が進められた。天保二年高橋景作は江戸へ出て長英の大観堂に入塾した。隣家の福田宗禎は章行の才能と向学心を見込んで出府を進めた。天保十年五月初旬、章行は家督を弟貞寿に譲って江戸に出て岩井重遠を介して白石長忠に入門した。これには、沢渡村が文政七年から清水卿の知行地となり、白石が清水卿家士であったことも関係しているとも言われている。その後、長英の蘭学の弟子で和算家である

幕府伊賀者内田弥太郎五観の瑪得瑪弟加塾に入門。内田への入門は福田宗禎から長英を介してなされたのであろう。それにしても五月十四日には「蛮社の獄」により、渡辺崋山が捕えられ、一旦身を隠した長英も十八日には北町奉行所に自首して、獄に繋がれることになる。このような長英の身辺の慌ただしさの中で、果たして章行の瑪得瑪弟加塾入門の橋渡しができたものだろうか。

果たしてこれを裏付けるかのように劍持の「旅中日記」の天保十年五月の個所には次のようにある『和算家劍持章行の遊歴日記』(大竹茂雄)。

「三日白石氏へ出、金足亭一対代百廿四文土産

五日高野氏へ出、葦料舎朱進上、江戸住居い

たし度旨咄しいたし候処、高野氏より内

田氏へ書状遣シ呉レ候而、内田^二先^一者住居

之筈^二相成^一、其次日邑楽屋帰リ宿代勘定い

たし内田へ引越シ申候

(この後は何故か九月廿四日になっている)

さらに続けて『劍持章行と旅日記』は次のように述べている。

「瑪得瑪弟加塾での修学中の様子を示す福田宗禎から劍持宛の書簡が残されている。蛮社の獄後の五月晦日、長英等の様子を福田宗禎

に知らせた書状に対し、福田から劍持に宛てたものである。

五月晦日の御簡六月十日達し、御出府御平安之趣承知仕候、大慶不斜候、平年方ハ暑氣も酷敷殊ニ久敷降雨も無之候、嗚々御府内ハ嚴敷暑氣と奉察候、御保護專一二奉存候、御家内一統無事ニ御座候、御降心可被下候、此節ハ内田氏ニ御寄宿之由、承知仕候、高野一条被仰聞候、其前いせ町秀造帰府崋山、高野子之事件 承知罷有候、扱々高野子薄命之人ニ御座候、可哀事ニ候、全体高野子外国之事を言出候て毎度噪々敷候故、前年度々異見支加へ候得共、不取用、此度困厄ニ及候趣き、自ら招き候禍ニ御座候、讒者之口も可止候得共、平素外寇等之事も言出、自も驚き人をも愕然為致候狂噪家故拙老方毎時諫言相加候事ニ御座候、ケ様成行候事可羅羅伺事ニ御座候、慎而自己之医事而已精究候ハ、何ぞ入牢之患可有之哉、医事ニも不關係夢物語など、編出シ、ケ様御上方疑を蒙り候事、多言多負之語を不守故ニ候、内田君ハ高野氏と交り候人々之間、追々高野の様子も相分り可申候間、御聞被遊候て御しらせ可被下奉希上候、大兄御出都ニ候てハ先退屈無之、御精研被遊候て交遊之中人物を撰ミ信義を御シシ御交り可被成候、必其中ニハ有益之人可有之候、

先急ニ事を不求方宜敷可有之候、大器晚成之語、御互ニ可被成候、何事も後音縷々可申上候、時下御保愛專一二奉存候、章斎方も宜敷御致音申上度申上候、

早々頓首

浩齋 宣

六月十九日
劍持要七雅兄 坐下

この書状によれば「高野子薄命之人ニ御座候、可哀事ニ候」と哀れみを以て書いている。また「前年度々異見支加へ候得共、不取用」ともあり、「此度困厄ニ及候趣き、自ら招き候禍ニ御座候」、「医事ニも不關係夢物語など編出シ、ケ様御上方疑を蒙り候事、多言多負之語を不守故ニ候」と言い切っているなど可なり長英に対して批判的である。

なお、因みに劍持の北武蔵周辺の門人には、戸根木格斎(熊谷)、明野栄章(熊谷)、金井稠共(本庄)、船戸吾兵衛(嵐山)、内田祐五郎(嵐山)らがいる。これらの内、金井は天保年間に劍持から教えを受けており、蛮社の獄について話を聞いているかも知れない。他の門人達が劍持から教えを受けたのは少し時代を下った頃である。

(以下次号に続く)